
バカとテストと召喚獣と

釘 繭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣と

【Nコード】

N3095V

【作者名】

釘繭

【あらすじ】

文月学園のFクラスで生活することになった少年とFクラスメンバー達の日常を描いた物語。彼は大荒れの文月学園をどのように過ごしていくのか。現在は『試験召喚戦争と』です。

プロローグ

俺が文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。
今俺は校舎へ続く坂道を上っている。
咲き誇った桜に一瞬目を奪われた。
しかし俺の頭にあるのは今年一年の運命を決める新クラスのこと
で一杯なのだ。

この少年の名前は『紗羅崎刀夜』である。

「紗羅崎、遅刻だぞ」

校門で野太い声に呼び止められる。
声のした方にはいかにも暑苦しい系の男が立っている。

「鉄人か……おはようございます」

軽く礼をしておくことにした。
相手は一応鬼教官の西村教諭だ。
すでに目をつけられているから今更これぐらいじゃ何とも思わない
だろう。

「鉄人と呼ぶなと何度言ったらわかる」

「じゃあ……鉄人教諭？」

「はあ……もういい。それにしても『おはようございます』

す』じゃないだろうが」

「ん？ すいません。 今日も一段と暑苦しいっすね」

「………… お前は遅刻の謝罪よりも俺を挑発することが重要なのか？」

「何のことだかさっぱりです」

「全く吉井、坂本といい………… 懲りない奴らだ」

「何の用ですか？」

「これだ、受け取れ」

投げ渡された封筒には『紗羅崎刀夜』と俺の名前が書かれていた。

「どーもどーも」

「興味ないのか？」

「まだ眠いだけですから」

現に俺はまだアイマスクをネックレスのように装備している。
いつものことだがな。

「興味はありますよ。 なんだって………… 戦争だろ」

「流石『眠る災厄』とでも言うべきか？」

「あんたから二つ名で呼ばれるとは思ってなかったぞ」

授業は9割が睡眠時間、問題の中心で過ごしてきた俺は『眠る災厄』
という二つ名で呼ばれるようになった。 了承した覚えはないんだよ
な。

さっきの封筒を開けると中には折りたたまれた紙が入っていた。

「やはりお前は予想通りのクラスに入ってくれたよ」

「よかったですね」

俺の通う文月学園は振り分け試験の成績順でクラスが決まっていく。
鉄人の言葉通りならどのクラスかは決まっている。
俺は紙を開いた。

『紗羅崎刀夜・・・・・・・・Fクラス』

「Fかあゝ」

「嬉しそうだな」

「当り前じゃないですか。最弱クラスですよ」

「できれば大人しくしてもらいたいな・・・・・・・・」

こうして俺の最弱クラスでの生活が幕を開けた

第一問

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだ

のだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

紗羅崎刀夜の答え

『問題点……鍋を買いおとせずに作るうとしたこと』

教師のコメント

問題そのものを否定しないで下さい。

どうやらここが噂のAクラスようだ。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。

よろしくおねがいします」

Aクラスの担任である彼女が告げると壁全体を覆うほどのプラズマディスプレイに

担任教師の名前が表示された。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいいますか？」

不備があると思ったやつは大声で名乗りをあげてほしいよ。

さらに教室内をのぞくと、まるで高級ホテルのロビーのようだった。

「では、まずはじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に来てください」

「・・・・・・はい」

前に立ったのは日本人形のように物静かな雰囲気を持ち、整った容姿をしている。

クラス全員の視線が集まる。

クラス代表・・・・・・クラス編成の為の振り分け試験で、この教室内で誰よりも

優秀な成績を収めた生徒。

そしてこのクラスはAクラス、つまり彼女は二年生のトップということだ。

注目されるのも当然だ。

「・・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします」

その目は同性の級友たちにも向けられていた。噂は本当なのかもしれない。

彼女は一年生の時からかなりの有名人でその美しさもあり男子生徒からの

告白が絶えなかった。・・・・・・が彼女の心を動かした者はいない。そのことから彼女は

同性愛者ではないかといううわさが流れたのだ・・・・・・確かに、そうなのかもしれない。

そして自分のクラスに向かおうとすると

「おはよう、刀夜」

「おう、明久」

去年のクラスメイトにして悪友の吉井明久に呼び止められた。
最低ランクの学力のバカ、そしてその行動の為俺同様鉄人に目をつ
けられている。

さらにバカの代名詞『観察処分者』でもある。

「俺はFだったよ」

「僕も同じだね」

「じゃあ行くか」

俺たちは走らない程度に廊下を進んでいった。

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で俺と明久は一度止ま
る。

「遅刻なんてしてきて大丈夫かな？」

どうやら明久は少し不安みたいだ。

「考えすぎだろ」

「そうかな・・・」

「初日からネガティブすぎなんじゃないか？」

「そうだね。信じよう、これから共に過ごす仲間たちを」

明久は勢いよくドアを開けて入っていったので後続く。
さらにそのままの勢いのまま愛嬌たつぷりに言い放った。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「俺もだ」

「早く座れウジ虫二匹」

明久・・・・・・・・俺は悪くないからな

「聞こえないのか？ああ？」

「雄二、明久はウジ虫でも構わないが、俺は違うぞ」

「刀夜！？」

いきなり罵倒してきたのは坂本雄二。明久と同じく悪友だ。

背は俺よりも少し高くて180センチ強はあるだろう。

鍛えられた体に野性味たつぷりの顔・・・・・・・・野生そのものだな。

「明久、雄二に何か聞きたそうだな」

「まあね・・・・・・・・雄二、何やってんの？」

「先生が遅いから代わりに教壇に立ってみた」

「雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「そうだ」

ニヤリとする雄二。それをきいて顔を綻ばせる明久。

雄二を説得すればクラスを動かせると思っっているのだろう。

「明久、お前じゃ無理だと思う、雄二の説得は」

「そうかな・・・・・・・・」

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

「雄二がああ調子だからな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイト達を見下ろす雄二。

「そつか……」

「でも流石Fクラスだな」

卓袱台に座布団とは斬新だ。

「空いているスペースでも探そうよ」

「ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後に冴えない風体のオッサンが立っていた。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めるので」

どうやら担任のようだ。

「はい、わかりました」

「うーっす」

「ひと眠りすっかな」

俺、明久、雄二は適当に返事をして適当に席に座る。

「えー、おはようございます。

二年F組担任の……。福原慎です。よろしくお願いします」

チヨークさえ用意されてないようだ。

「設備に不備があれば申し出てください」

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「あー、はい、我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れてて風が寒いんですけど」

「ビニール袋、セロハンテープの支給を申請しておきましょう」

教室はまるで廃屋のようだった。

「では自己紹介を始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

指名を受けた生徒は立ち上がり名前を告げる

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

誰かと思っていたら秀吉だ。

じい言葉にまるで女子みtainな容姿だからな。

「ちなみに刀夜と小学校からの親友じゃ」

『木下と小学校の頃から知り合いだと・・・・・・・・』

『刀夜つてのは一体どいつだ』

何やら聞こえるが気にしないでおう。

「・・・・・・・・というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑む秀吉。もはや女だ。

「・・・・・・・・・・土屋康太」

また知り合いのようだ。相変わらず口数が少ない。

目立つのは困るんだろうな・・・・・・・・・・いろんな意味で。

しかし男ばかりだ。この学校の男はバカばっかだな。

「・・・・・・・・です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。」

でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・・・・・・

「

珍しく女子の声がするよ。あ・・・・・・・・この人は・・・・・・・・

「趣味は吉井明久を殴ることです」

やっぱり・・・・・・・・

「・・・・・・・・あう。し、島田さん」

明久に手を振っているのは島田美波。そして明久の天敵だ。それにしても知ってる奴が多いな。

その後も自己紹介が続いて暇になってきたのでアイマスクを装着。寝ることにした。

『ダアアーリーーン!!』

不意に不愉快な大合唱に起こされる。

「・・・・・・・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

どうも明久が余計なことを言っただけらしい。

その後もさっきの繰り返しで、いい加減爆睡しそうな所で教室のド

アが開き、

息を切らした女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん」

『えっ？』

教室全体が驚きの声上がる。そりやまあ驚くよな。

クラスが騒がしくなる中、担任が声をかけた。

「ちょうどよかったです。自己紹介の途中なので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします」

優しい彼女の性格を表した可憐な容姿は、Fクラスの中で異彩を放っている。

だが、皆はその容姿に驚きの声を上げたわけではない。

「質問です！」

「なんですか？」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

聞き方によつては失礼な質問だな。でも、それがみんなの疑問。

彼女の可憐な容姿は人目を引く。それに加えて成績は上位一桁以内に常に名前を残すほどだ。

その彼女がそんな彼女がFクラスにいるはずがない。誰もが彼女はAクラスにいると思うだろう。

「振り分け試験の最中熱を出してしまひまして……」

試験途中の退席は0点扱いだからな。結果としてFクラスに振り分

けられたというわけか。

そんな姫路の言い訳を聞いて、クラス内でもちらほらと言い訳の聲が上がる。

『そういえば、俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大ウソをありがとう』

想像以上にバカだらけだな。

「ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そして彼女は雄二と明久の隣に座った。面白そうだからやりとりを見ることにした。

「あのさ、姫「姫路」

明久の声にかぶせて雄二が声をかける。明久が泣いているのは気のせいだろう。

雄二が少し話したところでやっと明久が話に加わる。

少しすると明久に興味がある『久保利光（オス）』の話になっていた。またしても明久が泣いている。

「はいはい。その人たち静かにしてくださいね」

あまりにうるさかったのか、パンパン、と教卓を叩きながら注意をする担任。

すると・・・・・・・・

バキィッ バラバラバラ・・・・・・・・

突如教卓がゴミ屑に。軽く叩いただけで崩れるとは、どこまで最低な設備なんだ。

「替えを用意してきます。少し待っていてください」

寝て待っていようかと思っていると、明久と雄二が教室の外にでてったので追うことにした。

第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』

『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏み

だり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

紗羅崎刀夜の答え

『（１）明久の正答』

『（２）寝坊した日の登校中に明久に会う』

教師のコメント

二人は仲がいいと聞いているのですが、違うのですか。

HR中だけあって廊下は静かだ。明久と雄二が話している。

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことない」

「そこで僕からの提案。『試召戦争』をやってみない？しかもAクラス相手に」

こんな面白い話を俺抜きでするとは……黙ってられない。

「その話、俺も混ぜてくれ」

「刀夜！？」

「てか最初から俺にも声かけろ」

「別に構わんが。それで明久、何が目的だ」

「だって、あまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。まったく勉強に興味のないお前がお前が、勉強用の設備の為の」

戦争を起こすなんてありえないだろうが。そんなやつは刀夜ぐらいだぞ」

バトルマニア
「俺を戦闘狂みたいに言うんじゃない。まあ、確か

明久は『試験校だからこそその学費の安さ』が理由でこの学校を選んだらしいからな」

「あー、えーっと、それは、その……………」

「姫路の為、か？」

「ど、どうしてそれを？」

明久……………お前はなんて単純な男なんだ。

「本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐ引つかかる」

雄二は楽しげな笑みを浮かべている。まあ俺もそんな顔をしているだろう。

「べ、別にそんな理由じゃ……………」

「見苦しい言い訳をするな」

「気にするな。俺自身試召戦争をやるうた思っていたところだからな」

「え？どうして？」

「当たり前だろ。こいつがこそ戦闘狂だからな」
バトルマニア

「それは違うぞ。世の中学力が全てじゃないという証明を試みてくたな」

「違うのかよ……………」

「Aクラスに勝つ作戦も思いついたしな……………おっと、先生が戻ってきたから教室に入れ」

「おう」

明久はいつまでも呆けていそうだったので無理矢理教室に入れた。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

教卓は替えたはずなのに、今にも壊れそうだ。

「えー、須川亮です。趣味は………」

特に何もなかったので俺は寝ていた。

「紗羅崎君、次はキミですよ」

「うい」

そっぴや俺もまだだったな……面倒だしアイマスクは着けたままでいいだろう。

「紗羅崎刀夜です。以上」

『あいつが木下の幼なじみか』

『木下の幼なじみということは、姉の木下優子とも親しいんじゃないか』

『間違いない。今すぐ始末しなければ』

周囲から殺気がしたので、アイマスクをはずす。

クラスメイトの数人から取り囲まれていた。今にも襲ってきそうな勢いだ。

「あー、はい。後にしてください」

後でなら何してもいいのか……それが教師の言うことか。

「西村先生を呼びますよ」

全員が席につく。魔法の言葉発動だな。

「坂本君、キミが最後の一人ですよ」

教壇に上がってきた雄二はクラス代表の貫録を纏っていた。

「坂本君はクラスの代表でしたよね」

うなずく雄二。まあクラス代表だとしても、Fクラスの代表じゃないともいえないな。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは好きなように呼んでくれ」

「よっ、野獣っ」

「刀夜は後で殺すとして、HRの後聞きたいことがあるから全員残っていてくれ」

そしてHRは終わった。

HRが終わり雄二が前に立って話し始める。

「さて、皆に一つ聞きたい」

全員の視線が雄二に向けられる。雄二の視線は教室の各所に移った。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

雄二の視線を追ってそれらの備品を眺める。

「Aクラスは冷暖房完備に加えて、座席はリクライニングシート・・・」

一呼吸おいて静かに告げる

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

二年F組の魂の叫び。

「だろう？俺だって大いに不満だ」

不満の声も次々とあがりだす。

「そこで代表としての提案だが・・・」

自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべる雄二。

「・・・FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよ

うと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

Aクラスへの宣戦布告。

Fクラスにとっては現実味の乏しい提案。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『紗羅崎の始末はまだなのか』

そんな悲鳴がAクラスとFクラスの戦力差が明らかになる。

文月学園のテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。

そのため能力次第でどこまでも成績を伸ばせるのだ。また『試験召喚システム』というものがある。

これはテストの点数に応じる強さを持った『召喚獣』を呼び出して戦うシステムである。

学力低下の激しい近年の生徒のモチベーションを高める為提案されたもの。

その中心にあるのが召喚獣を用いたクラス単位の戦争……試験召喚戦争だ。

戦争で重要なのはテストの点数。しかしAクラスとFクラスでは桁が違う。

Aクラス一人にFクラス何人もが必要になるだろう。

「必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

確かに勝算は低い。試召戦争を起こそうとした明久と雄二、俺だつてそう思う。

だけど単純な勝算を気にして止めるつもりはない。

「根拠ならある。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

その言葉にざわめくクラスメイトたち。

「それを今から説明してやる」

それでこそ俺の悪友だ。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって否定する康太と呼ばれる男は、畳の跡を隠しながら壇上に上がる。

流石だ。あんな行為ができるなんて、アイツ以外にいない。

「土屋康太。こいつがあムツリーニの有名な寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名は有名ではない。でも、ムツリーニという名は別だ。

その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツリーニだと．．．．．？』

『馬鹿な、奴がそうだというのか．．．．．？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ．．．．．』

『ああ。ムツリの名に恥じない姿だ．．．．．』

どんな状況でも下心は隠す。異名は伊達じゃないな。

「姫路のことは説明するまでもない。皆その実力は知ってるはずだ」

「えっ？私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かに彼女ほど頼りになる人はいないだろう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだっただ』

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

「木下秀吉だっている」

演劇部のホープとして有名な、俺の幼なじみ。

『おお．．．．．！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の．．．．．』

「紗羅崎刀夜もいる」

なぜここで俺の名前が出てくるんだろう。

『捕えろっ！！』

『木下だけでなく、姉の方とも親しいなんて……………』
『許せんぞっ！』

「勘違いだ」

「やめるのじゃー！！」

秀吉……………流石幼なじみにして親友。助かるよ。

「確かに刀夜はワシとも姉上とも親しい」

フォローになってない……………

「しかし刀夜はワシのことを男と誤っているぞい。まして姉上には
中学の時に「ストップっ！！」

「刀夜、お前……………木下優子にフラれたのか？」

秀吉の言葉で察したのか、雄二が全員に聞こえるような声で聞いてきた。

黙秘しろと本能が叫んでいる。

「……………」

「そうなのじゃ。始末の必要はないじゃろう？。」

そこに秀吉のとどめの一撃が入る。これでもう言い訳はできない。

周りにいた奴らも自分の場所へ戻った。

「まあ前に出ろ、刀夜」

雄二の奴、俺をはずかしめる気か。まあ仕方ないので、壇上に上がる。

「紗羅崎刀夜の二つ名は『眠る災厄』だ」

こいつばらしやがった。クラスメイトから驚きの声が挙がる。

『あいつが?』

『ただの眠そうにしてる奴じゃないのか?』

『まさかあのアイマスク・・・・・・・・』

「はいはい。そうですよ」

「明久、刀夜をこの鉄パイプで殴れ」

「ん? いいけど」

雄二、そんなものどこから持ってきやがった・・・・・・・・

明久、軽く承諾してんじゃねえよ・・・・・・・・

「じゃあいくよー」

ブンッ! ガキィッ!

『ええっ!?!』

驚くのも無理はない。俺が明久の攻撃を持つてる気配すらなかった日本刀で防いだからだ。しかも真剣だ。

「刀夜は常にいろんな武器を持ち歩いている」

『たとえば何を持ってるんですか？』

「答えなきやだめなのか？」

「教えてやれ」

「今のは日本刀。他には銃とかかな。もちろん、実弾ね。素手でも普通に戦えるよ」

一瞬凍る場の空気。仕方ないっちゃ、仕方ないんだろう。

「さっきの暴露で疲れた。席に戻る」

OKと目で合図をする雄二。俺は思いのほか疲れてしまった。

「今のでわかっただろうが、刀夜は俺たちの戦力になってくれるはずだ。」

当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人いるってことだよな！』

気がつけば、クラスの士気は上がっていた。

「それに吉井明久だっている」

・・・・・・・・・・シン

せっかく上がっていた士気が・・・・・・・・・・

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って？』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！せっかく上がっていた士気が下がってる！僕は雄二たちと違って

普通の人間なんだから普通の扱いを・・・・・・・・ってなんで僕を睨むの？

士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか、知らないなら教えてやる。こいつの肩書は《観察処分者》だ」

『・・・・・・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよっ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「学年一の問題児のことだろ」

「悪化してるよ、バカ刀夜！」

《観察処分者》である明久は、教師の雑用係をさせられる。

力のある召喚獣で物に触ることができるが、教師の監視下でなければ呼び出せない。

さらに召喚獣にかかる負担の何割かが本人にフィードバックする。

「気にするな。いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローするところだね？」

「とにかくだ。まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^ペを執れ！出陣の準備だ！」

『うおおーっ！！』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらふ。無事大役を果たせ！」

「………下位勢力の使者つてたいてい酷い目に遭わない？」

「大丈夫。お前はFクラスで一番の死者だ」

「刀夜、漢字が違わない？」

「気のせいだ。まあ、俺と雄二を信じるんだ」

「雄二、本当に？」

「俺を誰だと思っている」

力強く断言する雄二。

「俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「頼んだぞ」

明久は歓声と拍手に送り出されて、Dクラスに向かっていった。

「騙されたあつ！」

「やはりそうきたか」

「やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

その後、姫路に心配され、島田に殴られそうになる明久は面白かった。

「今からミーティングを行うぞ」

教室を出ていく雄二についていく俺たち。

ムツリーニはまだ頬をさすっている。畳の跡なら消えてるのにな。そして先頭の雄二が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出て行った。

第三問

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly .」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「● 「♪ * x

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

紗羅崎刀夜の答え

「ブックシェフは私の偉大なる母をレギュラーとして使った。」

教師のコメント

ブックシェフ？そしてあなたのお母さんは一体どんな人なのか気になります。

雲一つない空と眩しい光。風ではためく姫路のスカートを注視している

ムツツリー二を除いて、俺たちは目を細めた。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

俺たちはフェンスの前の段差に腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「仕方ないな。これで足りるか？」

「ありがとう、刀夜」

チャリン・・・・・・・・・・・・・一円

「・・・・・・・・ってこれじゃ何も買えないじゃないか！」

明久なら一円を食べると思ったけどな。気のせいかな。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

まあ規則正しい生活をしているであろう姫路が驚くのも無理はないな。

「いた。一応食べてるよ」

「……………あれは食べてると言えるのか？」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って……………水と砂糖だろう？」

雄二の哀れむような声。

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べているとは言いませんよ」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「だから去年一度も俺と雄二に勝てなかったんだよ」

「それは二人が強すぎるからだよ！」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

明久の両親は海外で仕事をしている。かなりの生活費を貰っているらしいが、

明久いわく趣味とは金がかかるらしい。

「……………あの、良かったら私がお弁当を作ってくださいようか？」

「えっ？」

字が違うぞ……………

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「しかも女子のдарろ？」

「うん！」

ずいぶん嬉しそうだ。俺も優子から……………

「（刀夜よ、今姉上から貰えたらなどと考えておったじゃろう？）」

「（何の冗談だ？）」

「（まあよいのじゃ）」

小声で秀吉に話しかけられた。危うく秀吉にばれるところだった。考え事をする時は注意しないとな。

「……………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも……………」

「俺たちにも？いいのか？」

「最近弁当も飽きてきたしな」

「学校が始まったのは今日のじゃが……………」

「はい。嫌じゃなかったら」

皆に作ってくれるなんて。どんだけいい子なんですか。

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

これで七人分。作るの大変じゃないのか。

「姫路さんって優しいね」

明久が切り出す。

「そ、そんな……………」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き……………」

「」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「……………にしたいと思ってました」

「明久。それでは欲望をカミングアウトしたただの変態じゃぞ」

「流石は明久だ。判断力がある」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「だって……………お弁当が……………」

まあ生きる為には仕方がないな。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？」

段階を踏むならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そつえば、確かにそうですね」

「当然考えあつてのことだ」

「戦うほどの相手じゃないから、だろ？」

「よく分かってるじゃねえか、刀夜」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ」

明久にはちゃんと説明しないといけないみたいだ。まあ雄二がしてくれるだろう。

「振り分け試験の時点では向こうが強かったが、実際は違う。お前の周りにいる面子をよく見てみる」

「美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人に、犯罪者が一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？雄二が美少女に反応するの!？」

「……………(ポツ)」

「ムツツリー二まで!？」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリー二」

恐らく美少女は秀吉と姫路のことだろう。馬鹿は雄二と島田か。

ムツツリは明らかに一人しかいないし、じゃあ犯罪者は……………

「明久、俺はどれなんだ？」

「刀夜はもちろん犯罪者だよ」

「俺のどこが？変な理由なら一発撃ち込んでもいいけど」

どこからともなく拳銃を構える。

「どこから出したの!ていうかそれ実弾だよ、刀夜待って!!
そんなことしたら僕死んじゃうから!」

「大丈夫だ。足で許すから」

「もはや許せてない!」

「刀夜もおちつくのじゃ」

「仕方ないな。まあ、最初からただの脅しだ」

そして雄二が説明を再開する。

「姫路に問題のない今、正面からでもEクラスには勝てる。
Aクラスが目標である以上はEクラスと戦っても無意味だからな」
「?それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの?」
「確実に勝てるとは言えないな」
「だったら最初からAクラスに挑もうよ」
「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ?」
「打倒Aクラスの作戦のうちでもあるんだろ?」
「そういうことだ。今日は冴えてるな、刀夜」
「面白いことには頭が働く体質なんだ」
「あ、あの!」
「ん?どうした姫路?」

姫路にしては大きな声を上げたもんだな。

「紗羅崎君と吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っ
ていたんですか?」
「それは明久が姫路の為に……………」
「それはそうと!」

俺と雄二の声を遮って、大きな声を出す明久。

「Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」
「負けるわけないさ」

ずいぶん自信があるらしい。

「お前らが協力してくれるなら勝てる」
「Aクラスでもか?」
「ああ。いいか、お前ら。うちのクラスは……………最強だ」

根拠のない言葉なのに、雄二の言葉にはその気にさせる力があるみたいだ。

「いいわね。面白そうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「……………(グッ)」

「が、頑張ります」

「暇つぶしにはもってこいだな」

打倒Aクラス。俺たちが本当にできるのかは少し不安だったが、俺は大賛成だ。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

屋上にて、俺たちは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

「雄二、今はどうなっている?」

「秀吉たちが渡り廊下で交戦中のはずだ」

「そうか……………なんで俺は前線じゃない?」

俺は今、教室待機状態だ。

「お前はまだまだ。簡単に使えないんだよ」

「ま、代表の言うことだから仕方ないな。一応だけど」
「前線部隊の声が聞こえるぞ」

雄二と共に耳を澄ます。

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補修室は嫌なんだ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補修室で特別講義だ。

終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれぬ気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には

趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ！誰か、助けっ……イヤア………（バタン、ガチャ）』

「まだ始まったばかりなのに激しいな」

「このままだと中堅部隊が逃走するかもしれない。刀夜、頼めるか？」

「任せとけ！」

やっと暇じゃなくなる。雄二もちゃんと俺のこと考えてのことかな。中堅部隊が見えてくる。明久と島田が何やら話している。

「総員退避よ」

来てよかったみたいだ。

「ん？紗羅崎じゃない。どうしたの？」

「伝言がある」

「何？」

明久、そんなのんきな顔はしてられないぞ。

「『逃げたら殺す（俺が）』」
「全員突撃しろーっ！」

任務完了かな。

「雄二、お前の言うとおりだった」
「だろうな。お前のおかげで助かった」

しばらくすると前線部隊が帰還してきた。回復試験の為だな。更に錯乱した島田を連れて須川が帰ってきた。須川はすぐ戻ったけど。

明久は何をしたんだろう。こんなに怒らせるなんて。

「世界史の田中を呼んだってことは長期戦か？」
「そうだ。Dクラスは数学の木内を連れ出したらしいから、短期決戦を望んでるんだろうがな」

須川がまた戻ってきた。サボりたいのか。一喝入れてやるか。

「須川、お前何してんだ？サボってるなら……分かるよな？」

「違っんだ紗羅崎っ！吉井が時間稼ぎの為の偽情報を流せって」
「刀夜、放送室に行ってくれ、そして（ゴニョゴニョ）」
「OK」

本当は戦闘に参加したいんだけど、これはこれで面白いからいいしよう。

そして放送室に到着。さて、ここからが本当のお楽しみだ。

第四問

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を

一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、
? ? ?の中から選りなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 『

姫路瑞希の答え

『(1) $X = 6/\pi$

(2) ? 『

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X \approx 3$ 『

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は

あげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

紗羅崎刀夜の答え

『(1) XはX以外の何者でもない。』

(2) ????の中のどれか。』

教師のコメント

分からないからといって、適当に書きすぎです。

雄二からの指令で放送室に来た俺、紗羅崎刀夜。
時間稼ぎをするために、雄二は俺にあることを頼んだ。

ピンポンパンポン《連絡致します》

それはDクラスに呼ばれた船越教諭(45歳♀独身)を別の場所に呼び出すことだ。

《船越先生、船越先生》

そして理由は……

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

これで終わりじゃない。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

今ごろ戦場にいい影響を与えているはずだ。

「刀夜あああああつっ！」

明久の叫びがここまで聞こえるとは、思わなかったけど。

教室に戻ると皆が援軍の準備をしていた。

「やっに行くのか？」

「ああ。そろそろ中堅部隊が厳しくなってくるところだろうからな」

そして援軍が出陣する。だいぶ前にいる中堅部隊は五人しかいない。

「明久、あと少し持ちこたえろ！」

相変わらず雄二の声はよく通る。

「試験召喚！」
サモン

ついに明久も召喚したようだ。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手を……………」
「があっ！」

「この部隊長はバカだ！俺一人で充分だから、皆は残りを！」

明久はバカだけど、舐めてかかると……………痛い目見るぞ。

「くたばれ吉井！」

「そうはいくかつ」

「なっ！？」

まあ予想通りだ。明久の召喚獣にこかされて驚いている。

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

「なにいつ！？」

凄いな。さすがは霧島翔子。Dクラス男子だけでなく、Fクラス男子、

更にはDクラス的女子まで振りかえっている。俺と雄二は除くけど。明久は混乱に乗じて次の行動に移る。

ガシャアアン！

窓が砕け散った。ずいぶんと手荒だな。

『な、なんだ！？なにごとだ！？』

「うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！」

消火器を手にする明久。そんなことして大丈夫なのか。

ブシャアアッ！

消火器の粉のおかげで周りが見えなくなった。

「う、うわっ！なんだ！？」

「ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

「島田さん！キミはなんてことを！」

「Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！彼女にしたいくない女子ランキングに載せてやるからな
！」

「そうだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる！」

「…………でも、男らしくステキ…………。お姉さま…………」

明久、死は免れないだろうな。そして俺たちもだいぶ近づいた。合流できるな。

「だあああっ！」

シュワアアアー

スプリングラーが作動。視界がクリアになる。

「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます
サモン！試験召喚！」

化学

Dクラス 中野健太 43点

VS

Fクラス 近藤吉宗 91点

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

「深追いはするな。俺たちも明久の部隊を回収したらいったん戻るぞ」

「追わないのかよ……」

「刀夜、ここは諦めてくれ」

「まあ、仕方ないか」

雄二の考えてることはだいたい分かったしここは退くことにしよう。
化学は唯一の得意科目だから戦いたい気もしたんだけどな。

「さて、無事なようだな。明久」

「うん、まあね」

俺たちは荒れた戦場を後にした。

教室に戻り、点数を消費した奴はテストを受け直した後だ。

「明久、よくやった」

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな」

「雄二、刀夜がどこにいるか知らない？」

どうせ俺に肅清をくわえようとしてるんだろう。

「俺ならここにいるぞ」

「シャアアアッ！」

包丁とブラックジャックで襲ってくる。けど軽くよける。

「使い方が甘いな。そしてあの放送を指示したのは雄二だ」

今度は雄二の方へ向かっていく。

「あ、船越先生」

明久は掃除用具入れに飛び込んだ。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合じやろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「今度は俺も戦っていいのか？」

「申し込まれない限りはじっとしてくれるとありがたい」

「またか・・・・・・・・」

「おっしや！Dクラス代表の首級くびを獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

教室から皆が出ていく。どうせ戦えないから一番最後に出発しよう。

「明久、船越教諭ならずつといないぞ」

「逃がすか、雄二いつ！」

ガシッ

「まあ落ちつけよ、明久。Dクラス代表でも倒しに行こうぜ」

「刀夜は場所知ってるの？」

「しらね。でも今は雄二のどこまで行けないだろ。お前は顔がばれてんだし」

戦場ではFクラスは下校中の生徒にまぎれながら取り囲んで戦っている。

「Dクラスの本隊だ！」

ついにDクラス代表の平賀が動き出したみたいだ。近くには現国の竹内と古典の向井がいる。

「明久、俺は現国と古典は怪しいから、お前が行くべきだと思う」

「僕もたいしてかわらないからね……それにここからじゃ途中で捕まっちゃうよ」

「まあ任せろ。よつと」

明久を持ち上げる。

「おらあつ！」

「うわっ！」

そのまま平賀のところにぶん投げた。明久も覚悟を決めたはずだ。

「向井先生！Fクラス吉井が……」

「Dクラス玉野美紀、試験召喚^{サモン}」

「なっ！近衛部隊！？」

ばれたのかよ。

「残念だったな、船越先生の彼氏くん？」

「ち、違う！あれは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を」

「わかりました」

「ちくしょう！あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

平賀は明久を一瞥している。

「まあ僕じゃ無理だろうね。だから……………」

俺の作戦成功かな。

「姫路さん、よろしくね」

「は？」

あの平賀の顔、傑作だな。

「あ、あの……………」

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

俺の作戦は明久が平賀たちの注意を引いているうちにこっそり姫路が近づいてドンって作戦だ。

まあ誰も姫路がFクラスとは思ってないだろうからこの作戦もそんなに意味はないんだけど。

俺の遊び心だ。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その………Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「………はあ。どうも」

「あの。えっと………さ、試験^{サモン}召喚です」

現代国語

Fクラス 姫路瑞希 339点

VS

Dクラス 平賀源二 129点

これは平賀も勝てないな。姫路の召喚獣は背丈の倍はある大剣を軽々と構えてるし。

「う、ごめんなさいっ」

相手の反撃をも許さない、圧倒的な勝利でこの戦いは決着した。

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

雄二はFクラスのやつらと握手をしている。

「僕も雄二と握手を！」

明久がやってきた。

「ぬおおっ！」

ガシッ

「雄二………！どうして握手なのに手首を押さえるのかな・
……？」

「押さえるに………決まっているだろうが………！フ
ンッ！」

「ぐあっ！」

手首をひねりあげられて包丁を落とす明久。

「………」

「………」

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「………」

「僕、仲間との達成感がこんなにいいものだなんて、今まで知らな
関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした？」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほど
に痛いっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「お、生爪か。ほらよ」

「これはでかいペンチだな。サンキュー、刀夜」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「………チッ」

そうこうしていると平賀が現れた。

「あ、その、さっきはすいません………」

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが

悪いんだ」

意外と素直だな。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから作業は明日で良いか？」

思えば少し可哀想だな。勝てば英雄のように扱われるが、負けてしまえば戦犯として扱われる。それが代表だからな。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「いや、その必要はない」

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「俺たちの目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「いや、近所の小学生だった気がする」

雄二に乗ってからかつてみる。

「……人違いです」

「「凶星がよっ！」」

さすがにここまでくると凄いと思う。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。条件付きでな」

「聞かせてもらおうか」

「俺が指示を出したら、あれを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

「Bクラスの室外機か」

「悪い取引じゃないだろう？」

確かにこれだけでFクラスの教室ですごすことを逃れられるなら、最高の取引だ。

なぜ雄二がそんなことをするか。恐らく……

「次の試召戦争の作戦か？」

「そうだ。次はBクラスに挑む」

「ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについてはまた今度だ。今日は帰っていいぞ」

そして平賀は去っていった。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、

今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！解散！」

雄二の号令で皆クラスへ向かい始める。帰りの支度だろう。

「明久、雄二。俺らも帰ろうぜ」

「そうだな」

実際、俺は点数は消費してないんだけどね。

「あ、あのっ、坂本君っ」
「ん？」

雄二を呼びとめる姫路。

「お、姫路。どうした？」

「実は坂本君に聞きたいことがあるんです」

「おう。わかった」

雄二は姫路と俺たちから少し離れた場所で話し出した。

「明久、俺は教室で待つとくから、お前は雄二を待つとけ。」

あと姫路のスカートを捲ろうとか考えるなよ」

「え？あつ、うん」

しばらくすると二人が帰ってきて家に帰りだした。

「それにしてもさ」

「ん？」

「Dクラスを倒さなくてもエアコンぐらい壊せたんじゃない？」

「それは俺も気になった」

「ああ、そのことか」

俺と明久と雄二は家の方向が同じだからよく一緒に帰る。

「理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れさせるためだとか、

他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとかな」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「それなら俺でも分かるぞ。満足させずにモチベーションを維持するため、だろ」

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺に任せておけ」

「……………ありがとう。僕のわがままの為に」

「別にそんなわけじゃない。俺は試召戦争の為にこの学校に来たんだからな」

雄二は昔、神童と呼ばれていたらしいが、なぜ今のようになったのだろう。

まあ、いろいろあるんだろうしなかなか聞く気にならない。

「目的に為にも、刀夜と明久にはきっちり協力してもらってからな。まずは明日の補給テストで」

「……………ぐう」

「俺もなのか？」

「お前は振り分け試験は化学以外死にかけだっただろうが」「記憶にないねえ」

どうやら明日は全教科受験らしい。やれやれ。一日かかるじゃないか。

「二人ともだらしないで、少しぐらい勉強しとけよ」

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

「……………あほ。さっさと取って来い」

「うう……………。んじゃ、先に帰ってていいよ」

「もちろんだ。待つてゐるわけがないだろう」

「刀夜は？」

聞かれたから忘れ物がないか探してみる。

「どうやら俺も忘れ物をしたらしい」

「なに？教科書？」

「いや、教科書は持ってきてない」

「じゃあなんだ？」

「シヨットガンだ」

「「シヨットガン！？」」

「たぶん教室にあるだろ」

「実弾なんだろ？」

「まあな」

「刀夜、それは早く取りに行かないと！」

「そうだな。行くか、明久」

「うん。じゃあね、雄二」

少々走って学校に到着。

「たっだいまー」

「おかえり」

我が家のように教室に入る俺と明久。

「よ、吉井君！？紗羅崎君！？」

「あれ？姫路さん？」

「おう」

「どとどどうしたんですか？」

姫路の座っているところを見る。卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

そういえば姫路は明久のことが……………

「あ、あのっ、これはっ」

明久がおかしなことになっている。まるで自分の中の天使と悪魔と話してるみたいだ。

「これはですね、そのっ」

「うんうん。わかってる。大丈夫だよ」

「えっと……ふあっ」

卓袱台につまずいてこける姫路。その拍子に手紙が俺たちの前に飛んでくる。

《あなたのことが好きです》

「……………」
「……………」

手紙をたたんで返す明久。

「変わった不幸の手紙だね」

「お前どうしたんだ？」

「あ、あの、それはそれで淒く困る勘違いなんですけど……………」
「……………」

「そんなことをしないで、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。」

ああ大丈夫スタンガンなら隣のクラスの山下君に借りてくるから」

「明久？」

「これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だ！それは不幸の手紙だ！実際に僕はこんなにも不幸な気分になっっているじゃないか！」

それはお前の勘違いだと思う。

「吉井君」

明久が姫路に手を握られている。

「落ち着いてください。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしちゃいますよ?」

「・・・・・・仕方ない。現実を認めよう・・・・・・」

「頭大丈夫か?」

「その手紙、相手はうちのクラスの・・・・・・」

こいつ俺を空気だと思ってるんじゃないのか。

「・・・・・・はい。クラスメイトです」

俺が空気になってから数分。

「その手紙」

「は、はい」

「いい返事が貰えるといいね」

「はいっ!」

どうやらこいつは姫路が雄二に恋してるとでも思っているんだろう。

「で?いつまで俺のことしかとするつもりだ?」

「あっ!ごめん、刀夜」

「まあいいや。用事済んだから帰ろうぜ」

「ショットガンあったんだ」

「卓袱台の上にな」

「ははは・・・」

そして初の試召戦争があつた今日が終わつた。

第五問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

紗羅崎刀夜の答え
『俺の武器』

教師のコメント

あなたの武器は決して『光』と呼べるようなものではありません。

翌朝、登校中になぜか明久に遭遇。

今日は試召戦争で消費した点数の補給でテスト漬けらしい。

俺には全然関係ないんですよ。

「よーっす」

「おはよー」

相変わらず汚い教室だ。分かってはいてもDクラスの設備を貰っていればと思う。

「おう刀夜、明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二」

「悪あがきか？」

雄二は胡坐をかいて、英語の教科書を手にしている。

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？何がだ？」

「Dクラスの設備のことだろ」

「ああ。皆にもきちんと説明したからな。問題ない」

「ふーん」

「どうせAクラス狙いだからな。興味がなくなっただろう」

「それより明久、昨日の後始末はいいのか？」

「うん。いくら僕でも、生爪を？がされるとわかっていながら行動するなんてありえないよ」

「雄二が言ってるのは島田のことじゃないのか」

「刀夜、それってどういう……」

「吉井っ！」

「ごぶあっ！」

「し、島田さん。おはよう……」

「おはようじゃないわよ！」

明久は朝から大変だな。

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽きたず、消火器のいたずらと窓を割った件の

犯人に仕立て上げたわね……！」

それは怒っても仕方ないと思う。

「おかげで彼女にしてくれないランキングがあがっちゃったじゃない！」

怒るポイントそこかよ。まあ今何位なのか凄く気になる。

「……と、本来は？みかかっているんだけど」

さっき殴ったから、その言葉には何の意味もないだろうに。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ」

「そうじゃなくてね。一時間目の数学のテストの監督、船越先生だ

って」

その瞬間、明久は走りだした。

「うあー……づかれたー」

「それで、あれはどうなった？」

「近所のお兄さん？を紹介してあげたよ」

「何とか逃れたんだな」

「まあね……」

「うむ、疲れたの」

秀吉が現れる。男のくせになぜかポニーテールだ。本当に男らしくしてゐるつもりなのか。

最近じゃ俺も少し女なんじゃないかと思うようになってきてしまった。

「……………（コクコク）」

ムツツリーニもいるじゃないか。いつからいたんだろう。

「よし、昼食だ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯チャーハンとカレーにすっかな」

雄二はいろんな意味で身体がおかしいんだと思う。

「吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「……………（コクコク）」

まあせつかくの昼食だ、食わなきゃ損だな。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを……………」

「あ、あの。皆さん……………」

「もしかして昨日言ってた弁当か？」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

これで作ってくれる人が……………と危ない。気をつけないと。
よかった、秀吉は気づいてないみたいだ。

「それでは、屋上でも行くかのう」

「だな」

「そうか。お前らは先に行つててくれ」

「雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる」

「珍しいな。そんなことを雄二がするとは」

「昨日の礼も兼ねてな」

「それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「じゃ、行つてくる」

雄二と島田はたぶん一階の売店に行つたはずだ。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

屋上につき、シートの上に座る。

「あの、あんまり自信はないですけど……………」

重箱の蓋が外される。

『おおっー!』

凄く旨そうだ。

「雄二には悪いが先に貰ったこうぜ」

「そうだね。こんなの待って……………」

「……………(ヒョイ)」

「「ずるいぞムツッリーニ」」

エビフライをつまみ取るムツッリーニ。

「……………(パク)」

バタン ガタガタガタ

豪快に倒れて、痙攣しだした。

「……………」

「……………」

「……………」

俺と明久と秀吉の目が合う。

「わわっ、土屋君!？」

「……………(ムクリ)」

あ、起きた。

「……………(グッ)」

そして親指を立てる。『凄く美味しい』と伝えたいのだろうが、震える足は死を予感させる。

「（……………二人とも。あれ、どう思う？）」

明久が小声で話しかけてくる。

「（……………どう考えても演技には見えん）」

「（食えば死ぬ可能性もあるな）」

「（だよね。ヤバイよね）」

「（二人は身体は頑丈か？）」

「（胃袋に自信はないよ。食事が少ないから退化してるし）」

「（俺も胃は普通ノーマルだと思う）」

「（ならばワシに任せてもらおう）」

「（そんな、危ないよ！）」

「（大丈夫じゃ。ワシはジャガイモの芽程度なら食ってもびくとも
せんのだ）」

そんな人間初めて見たよ。

「（ワシの鉄の胃袋に任せるのだ）」

「（いや、あれはたぶん危険な化学薬品が入ってる。俺の悪い勘は
当たるからな）」

ここは止めないとまずい気がしてならない。

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二登場。

「「「あつ、雄二」」」

止める間もなく卵焼きを口に放り込む。

パク バタン ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジューズをぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

島田がムツツリー二のように震える雄二に駆け寄る。
「・・・・・・・・これはヤバイ。」

『毒を盛ったな』

目で訴えてくる。

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

『ああ。プロも軽くビビらす実力だな』

俺と明久も目で返す。便利な能力だ。

「あ、足が・・・・・・・・攣ってな・・・・・・・・」

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないか」

「うむ、そうじゃな」

「ちゃんと鍛えとけよな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思っけど」

この状況で島田は邪魔だな。どうにかしないと。

「ところで島田さん」

ここは明久に任せよう。

「その手をついているあたりに虫の死骸があつたよ」

「ええっ！？早く言つてよ！」

ナイスだ明久。今日は頭が回ってるじゃないか。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がいいよ」

「そうね。ちよつと行ってくる」

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだ」

はっはっは、と朗らかに笑っている一方で、小声の作戦会議は続いていた。

「（明久、今度はお前がいけ！）」

「（む、無理だよ！きつと死んじゃう！）」

「（さすがにワシも決意が鈍るのう・・・）」

「（俺も明久が食べるべきだと思う）」

「（なんでだよ？刀夜？）」

「（姫路は最初、明久に作ろうとしてただろ）」

「（姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）」

「（俺に押しつけてんじゃねえ！）」

「（明久は乙女心がわかってないようじゃのう）」

「（仕方ない。俺に任せろ）」

こうなったら強行突破だ。

「姫路っ、あれはなんだ!？」

「えっ?なんですか？」

俺の指した明後日の方向を見る姫路。

「（おらあっ!）」

「（もごああっ!）」

その隙に雄二の口に全ての弁当を詰め込む。

「（明久、手伝え）」

「（うん）」

明久は顎を?んで咀嚼を手伝う。これで全ては雄二の腹の中に消えた。

「これで問題ない」

「終わったね」

「…………お主ら、存外鬼畜じゃな」

まあ一件落着だ。気にしないでおう。

「悪い、見間違ひみたいだ」

「あ、そうだったんですか」

「ああ。弁当旨かったぞ」

「美味しかったよ。ごちそうさま」

「うむ、大変よい腕じゃ」

雄二の大活躍で全てが解決、俺たちの心は青空のように晴れ渡って

いた。

「早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。雄二がもう凄い勢いで」

「本当にありがたいな。なあ雄二」

「う．．．．．うう．．．．．。あ、ありがとうな、姫路．．．．」

ヤバイ。目が死んでる。

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が．．．．．」

「いいぞ明久。話を逸らすことで『それじゃ、また作ってきますね』を避けられる。」

「ああ、あの店じゃな。確かに評判がよいな」

「今度雄二におごってもらおうぜ」

「勝手なこと言うなつての」

その後はほのぼのした時間が続いた。

「あ、そうでした」

嫌な予感がする。

「デザートもあるんでした」

「姫路っ！あれはなんだ！？」

「刀夜！次は俺でもきつと死ぬ！」

くっ、反応するとは。

「（刀夜！殺す気か！？）」

「（明久と秀吉だつてきつと同じ考えだ）」

「（そうだよ。こんな任務雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）」

「

「（そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんものはできん！）」

「（この意気地なしっ）」

「（そこまで言うならお前にやらせてやる！）」

「（僕をどうする気！？）」

「（とにかく歯を食いしばれ！）」

「（二人ともいったん落ち着け！）」

「（お前でもいいんだぞ！）」

雄二が拳を握り、俺か明久がやられそうになった時、秀吉が立ち上がった。

「（・・・ワシがいこう）」

「（秀吉！？無茶だよ、死んじゃうよ！）」

「（俺も止めた方がいいと思う）」

「（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）」

そりゃそうだ。明久からしたら美少女だし、俺は幼なじみなんだから。

「（大丈夫じゃ。ワシの鉄の胃袋なら消化不良程度じゃろう）」

もしかしたら秀吉の鉄の胃袋でいけるかもしれない。

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「今から食べるところだ！」

「あ、もしかして………」

嫌がってるのがばれたのか。

「スプーンを忘れてました。取ってきますね」

階下へと走る姫路。

「では、この間に頂いておくとするかの」

容器を手にする秀吉。

「………すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「秀吉………男だな」

「死ぬわけではあるまい。そうきにするでない」

「そ、それもそうだね！」

「ああ！秀吉、頼んだぞ！」

「グッジョブ！」

「うむ。任せておけ。頂きます」

一気にかきこむ秀吉。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃゴばあっ！」

また一輪、花が散った。命という儚い花が。

「．．．．．雄二」

「．．．．．なんだ？」

「さっきはゴメン」

「．．．．．わかってもらえたならいい」

自称『鉄の胃袋』は白目で泡を吹いていた。

第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

紗羅崎刀夜の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

そういえば紗羅崎君は化学だけ得意でしたね。忘れていました。

激しい昼食を終え、皆でのんびりお茶をすす。島田は憤慨していたが、感謝してほしい。

「次の相手はBクラスらしいな？」

「ああ。そうだ」

「なんでBクラスなんだ？」

Aクラスを目標にしている俺たちが、Bクラスを相手にする理由が正直分らない。

「どんな作戦でも、うちの戦力ではAクラスに勝てないからだ」

「らしくないな」

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

島田がこの話の流れからして当り前のことを口にする。

「いいや、Aクラスをやる」

「さっきと言ってることが違うじゃないか」

明久も入ってきた。

「一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「どうやって？」

「Bクラスを使う」

明久はよく分からないといった顔をしているが……………

「そういうことか！」

「分かったのか、刀夜？」

「要はBクラスをやった後、設備を入れ替えないでAクラスに攻め込んでもらうようにする。」

「そしてもしAクラスに負けてもCクラスの設備で済むからな」

「まあそんなところだ。それをネタにAクラスと交渉をする。」

『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね」

明久も理解したようだ。

「じゃが一騎打ちよりも試召戦争の方が現実であろう。」

「そもそも一騎打ちで勝てるのか、というのが問題じゃ」

確かにFクラスで一番成績のいい姫路は何らかの対策をされてるだろう。

「まあ俺もいろいろ考えがある。とにかく今はBクラスをやるぞ」

「今回も死者は明久か？」

「そつだ。明久にしか使者はできないからな」

「断る。刀夜か雄二がいけばいいじゃないか」

「それならじゃんけんで決めないか？」

「OK。乗った」

「俺も大丈夫だ」

「よし。負けた奴が行く、で良いな？」

「ただのじゃんけんでもつまらないから、心理戦ありな」

俺が提案すると早速明久が乗ってきた。

「それなら僕はグーを出すよ」

「じゃあ俺は……」

雄二は何を出すんだろう。

「お前がグーを出さなかったらぶち殺す」

「俺もそれでいいや」

「行くぞ、じゃんけん」

「わああっー！」

パー（俺） パー（雄二） グー（明久）

「決まりだ。行って来い」

「絶対嫌だ！」

「殴られはしないって。なあ雄二？」

「保証しよう」

「騙されるもんか！」

「Bクラスは美少年好きが多いらしいぞ」

「なら僕が適任だね」

「怪しいな……」

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「もう0度でいいんじゃないか？」

「三人なんて嫌いだった」

「とにかく頼んだぞ！」

そして昼食が終わり、午後のテストが始まった。

「・・・・・・・・言い訳を聞こうか」

放課後、Bクラスに宣戦布告に行った明久は、ボロボロで帰ってきた。

「予想通りだ」

「くきいー！殺す！殺しきるーっ！」

「まあ落ち着けて」

「ぐふあっ！」

ちよつと五月蠅かったので、鳩尾に一発入れた。

「先に帰ってるぞ。明日も午前はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

「俺も雄二と帰ってるからな」

さて、明日が楽しみだな。とりあえず帰ってから寝よう。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に雄二が立って話している。このテスト俺に何の利益をもたらしたんだろう。

「午後はBクラスとの試召戦争だ。殺る気は充分か？」

『おおーっ!』

「今回の戦闘では、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ!』

「そこで前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらっ。野郎共、きちり死んで来い!」

「が、頑張ります」

『うおおーっ!』

姫路が参加するなら、廊下での戦闘は楽勝だろう。

キンコーンカーンコーン

「よし、行つて来い! 目指すはシステムデスクだ!」

『サー、イエッサー!』

今回は理系教科を中心に攻めるらしい。Bクラスに文系が多いからだろう。

「で? 俺はまだ戦つてはダメと?」

「もう少し待ってくれ。今回のBクラス戦では出番を用意している」

「じゃ、ちよつと屋上で寝てていいか?」

「あまり遅くなるなよ」

「おう、じゃあな」

俺は誰にも見つからないように屋上へ向かった。

「これはどういうことだ？」

俺が戻つてくると、卓袱台は穴だらけ、シャーペンが折られていた。

「俺たちがBクラスとの協定を結んでいる間にやられた」

「協定？」

「四時までに決着がつかなかったら明日午前九時に持ち越すそうだ」

「承諾したのか？」

「そのほうが姫路の万全の状態で勝負できて都合がいいからな」

しかしBクラス代表根本恭二がこんなに甘い男とは思えない。評判も悪いし。

「雄二、根本がこれで終わるとは思えない」

「俺もそうは思うが今は目の前の戦いに集中するしかない」

「そうか。俺のシャーペンは無事みたいだ。ん？」

「どうかしたのか？」

かばんの中を確認すると、常に持ち歩いているものがないことに気付いた。

「俺のかばんに入っていたフォトアルバムを知らないか？」

「知らないな。なくなったのか？」

「ああ。家に忘れたのかもしれない」

「根本に取られたんじゃないのか？」

「もしそれが確認されたら、根本はぶち殺す！」

「やけに大事なものなんだな」

「それはもう大事なものだ」

そうこうしていると協定の時間となった。途中で運ばれてきた死にかけの明久は気にしない。

「……………（トントン）」

「お、ムツリーニか。何か変わったことはあったか？」

ムツリーニと雄二が何やら大事そうな話をしている。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「……………（コクリ）」

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「雄二、どうするんだ？」

「Cクラスと協定でも結ぶか」

「まあDクラスを使って脅しとけばいいかな」

「それに僕たちが勝つなんて思ってもないだろうしね」

「よし。それじゃあ今から行ってくるか」

この調子ならCクラスとの協定は上手くいきそうだ。

「秀吉は念のためここに残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくてよいのか？」

「面が割れると、困るんだろ」

「刀夜がそう言うのであれば残ろう」

「俺もよく分らないんだけどな」

「じゃ、行こうか」

秀吉を残し、俺、明久、雄二、姫路、ムツリーニというメンバー

でCクラスへ。

その後、島田と須川も加えて、七人でCクラスに行くことになった。

「Fクラス代表坂本雄二だ。このクラスの代表は誰だ？」

「私だけど、何か用かしら？」

現れたのは気の強そうな女子。

「（明久、アイツ誰？）」

「（確か、小山さんじゃなかったかな）」

「（まあ興味ないからいいや）」

「Cクラスと不可侵条約を結びたい」

「どうしようかしらね、根本クン？」

根本だと。

「当然却下。必要ないだろ」

「Bクラス代表のお前がなぜここにいる？」

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言つて……」

「先に協定を破つたのはそっちだからな？これはお互い様、だよな！」

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を……」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試験^{サモン}召喚！」

ファインプレイだ須川。危うく雄二に攻撃されてた。

「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスの・

「……」

「無駄だ明久！根本は『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしてしらを切るつもりだ！」

「とにかく逃げるぞ！」

須川も長くは持たない。急いで逃げないと。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

「あ、あの、さ、先に……行つて、ください……」

ここで姫路を失うのは厳しい。誰かが残つてBクラスを止めるしかない。

「雄二！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ！」

「吉井君、私のことは、気に、しないで」

「……わかった。ここはお前に任せる」

流石雄二だ。最善の処置を把握している。

「……（ピタッ）」

「ムツッリーニ、お前は逃げる。代わりに俺が残る」

「刀夜！ありがとう」

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら隊長どの？」

「……頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

島田は俺や明久より数学ができるし、これならいけるか。

「……さて、どうするの、隊長どの？」

「うん。僕に考えがあるんだ」

「珍しいな。明久に考えがあるなんて。まあ任せる」

『いたぞっ！Fクラスの吉井と紗羅崎と島田だ！』

『ぶち殺せ！』

正面から現れるBクラス。やはり長谷川教諭もいる。

「Bクラス！そこで止まるんだ！」

珍しく強い口調の明久。

「いい度胸だ。たった三人で食い止めようってのか」

「いや、その前に長谷川先生に話がある」

「なんですか、吉井君」

「Bクラスが協定違反をしていることはご存知ですか？」

「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはFクラスのようなですね。そこで反撃を

受けて協定違反を訴えるのは、戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ」

根本が説明したんだからこうなるのは仕方ないな。

「（紗羅崎、吉井は大丈夫なの？）」

「（期待しとこうぜ）」

明久は一瞬考える顔をしてから、応えた。

「・・・・・・・・万策、尽きたか・・・・・・・・」

『こいつ馬鹿だぁーっ!』

「坂本君、吉井君と紗羅崎君は、大丈夫、なんですか・・・・・・・・？」

「もちろんだ。明久と刀夜ならなんとかなる」

「でも・・・・・・・・」

「あいつらは勉強ができない。だが学力で全てが決まるわけじゃないだろう」

「そ、それは、どういう・・・・・・・・？」

「あのバカども、伊達に《観察処分者》とか《眠る災厄》とか呼ばれてないってことだ」

『サモン
試験召喚!』

逃げて行くうちにに行き止まりにきてしまった。こうなったらやるしかない。

『サモン
試験召喚!』

島田も召喚獣を出したようだ。

数学

Bクラス 工藤信二 159点

VS

Fクラス 島田美波 171点

島田は問題ないだろう。

「明久、俺たちもやるしかないぞ」

「うん。僕たちのコンビネーションを見せてあげよう」

ついに戦闘ができる。俺は嬉しいぞ。

「「^{サモン}試験召喚！」」

明久と俺の召喚獣が姿を現す。

「吉井と紗羅崎は構うな！雑魚だ！」

「紗羅崎の召喚獣なんてパジャマに武器なしだぞ。アイマスクつけて寝てるんじゃないのか」

俺たちは相手にされず島田の召喚獣にBクラスの女子が切り込む。

「明久！いったぞ」

「えい、足払いっ」

明久の召喚獣が敵の足を引っ掛ける。

「ああっ！」

「更にっ！」

木刀を叩きこみ頭を？む。

「いいいよいしょおーっ！」

こん、と頭を叩きつける音が響く。

『・・・・・・・・え？』

「こっからだぞ明久」

数学

Bクラス 真田由香 166点

VS

Fクラス 吉井明久 51点

Fクラス 紗羅崎刀夜 48点

「なんで真田の召喚獣がやられてんだよ」

「あれ？私の召喚獣まだ生きてる」

「吉井、どういうこと？」

「んー・・・・・・・・。まあ《観察処分者》の数少ない利点ってところかな」

「要は召喚獣の操作に慣れてるってことだ」

「ぐ、偶然よ！」

敵が再度突撃してくる。

「うりゃっ」

受け流す明久の召喚獣。

「明久！援護する」

俺の召喚獣が拳銃を取り出す。ちなみに俺の召喚獣には点数を消費することで好きな武器を使える。

強い武器を出すには高い点数が必要だから、元の点あまり高くな

い俺には何とも言えない能力だ。

というかなんで俺の召喚獣だけこんな能力がついてるんだろう。

バンバンバン

敵の召喚獣の手を狙って撃つ。こういうゲームみたいなのは得意だ。

「……………つく！」

「はぁあっ！」

武器を落とした敵に明久が追撃をする。

数学

Bクラス 真田由香 115点

VS

Fクラス 吉井明久 51点

Fクラス 紗羅崎刀夜 38点

点数が修正されるが、やっぱり俺たちの召喚獣は弱いな。このままじやきりがない。

「明久！この状況じゃ明らかに無理だ。何かないのか？」

「うーん……………。あ！島田さん、あれを！」

あれは消火器か。なるほど。

「了解！」

これで目くらましか。逃げれる……………

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・はずだが、島田が動かない。」

「島田！明久が何でも言うこと聞くから！」

「じゃ、今後ウチは吉井のことを『アキ』って呼ぶから、『美波様』って呼ぶように」

「み、美波様！これでいい！？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな」

「おのれ！なんという贅沢を「OKらしいぞ」

「刀夜！？僕の生活が・・・・・・・・」

「がんばれ！！」

「じゃ、最後に」

「まだあるの！？もういいでしょう！？」

明久がちよこつと犠牲になるだけでここから逃げれるなら三人にとつて安いものだ。

「ウチのことを愛してるって、言ってみて？」

大胆だな、おい。

「ウチのことを愛してる！」

そしてお前はバカだな。

「・・・・・・・・・・ばか」

ブシャアアッー！

こうしてどうにか脱出に成功。
その後、島田の機嫌が悪かったのは言うまでもない。

第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best bad - worse - worst』

教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではダメです。覚えて

おきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

紗羅崎刀夜の答え

『good - very good - very very very
bad - very bad - very very bad』

教師のコメント

veryを過信しすぎではありませんか。

教室に帰ると明久は早速島田に足を踏みつけられていた。

「疲れたー」

「刀夜も無事だったか」

「ああ。それよりCクラスはどうするんだ？」

「それは問題ない。明日の朝にでも実行する。目には目を、だ」

この日はそれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しになった。

「昨日言っていた作戦を実行する」

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Cクラスのほうだろ」

「なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にこいつを着てもらっ」

雄二が取り出したのは、うちの学校の女子の制服。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

いや、男らしくありたいなら構うべきだろ。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう」

そんなことしたのがばれたら秀吉は優子によって死者となるだろう。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……………」

秀吉はその場で生着替えを開始。明久やムッツリーニはおかしなことに。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「あ、僕も行くよ」

「俺も行こうかな」

こうしてCクラスの前に到着。

「さて、ここからは一人で頼むぞ、秀吉」

「気がすすまんのう……………」

「そこを何とか頼む」

「むう……………仕方ないのう……………」

「とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ」

「秀吉ならよーだろ」

「はあ……………。あまり期待はせんでくれよ……………」

「雄二、刀夜、秀吉は大丈夫なの？」

「たぶん大丈夫だろう」

「よーだって」

「心配だなあ……」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

やっぱりな。

「刀夜、これって似てるの？」

「半分はな……」

「幼なじみなんだろう、それぐらい分かるんじゃないのか？」

「悪いな雄二。これ以上喋るともしもの場合俺の命に関わる」

まあこれでCクラスの敵意はAクラスに向いただろう。

『な、何よアンタ！』

これは昨日の小山とかいう奴だな。ずいぶんお怒りだ。

『話しかけないで！豚臭いわ！』

優子もここまでは言わない気がする。

『アンタ、Aクラスの木下ね？何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！』

貴方達なんて豚小屋で充分だわ!」

『なっ!言うことに欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!?
』

Fクラスが豚小屋。こいつは俺たちを何だと思ってるんだ。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

優子はこんなこと言わない。もはや断言できるぞ。これが優子にばれたらどうするつもりなんだろう。

『ちょうど試召戦争の準備もしてるようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから!』

そして秀吉が戻ってきた。どこことなくスッキリしている。

「秀吉、優子にばれたらどうするつもりだ?」
「!」

瞬間、秀吉の顔が青ざめる。

「流石にフロアできないからな。俺も死にたくないし」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺たちは早足でFクラスに向かい、Bクラス戦の準備を始めることにした。

教室では本隊が待機中。Bクラス前で明久、秀吉、姫路が戦っているらしいが、

さつき姫路の様子がおかしいって情報が入ってきた。

「雄二、どうするんだ？」

「どうしようもなければ、お前が化学で特攻する」

「それは止めてほしいな。俺の召喚獣は点数の消費が激しいから、多対一をするには不利なんだぞ」

「大丈夫だ。そうならないようにする」

「頼んだぞ。そういえば昨日のフォトアルバムの件なんだが、がちで無くなった」

「そのフォトアルバムには、一体何の写真が？」

「それは……聞かないでくれ」

「ん？ああ。そういうことか」

「俺は根本が怪しいと思うんだが、Bクラスの方へ散歩してきてもいいか？」

「帰ってこれるならな」

「んじゃ、サクツと行ってくる」

そしてBクラス前に到着。確かに姫路の様子がおかしい。

「明久、大丈夫か？」

「刀夜、こんなとこにいていいの？」

「ちよつと用があつてな」

『右側出入り口、教科が原告に変更されました！』

『数学教師はどうした！』

『Bクラスに拉致された模様！』

「これってヤバいんじゃないのか？」

「文系科目に切り替えられるなんて、ピンチだ！」

「明久！どうすんだ？」

「私が行きますっ！」

姫路が行くのか。なら問題ない。

「あ……………」

姫路の動きが止まる。何かを見て動けなくなったみたいだ。その目線の先には……………根本。

「っ！！！」

「明久、根本が何を持ってるか見えたのか？」

そして俺にも見えた。根本が持っていたのは姫路の手紙。

「……………なるほどね。そういうことか」

姫路に話しかけようとする明久。たぶん姫路を戦線離脱させるつもりだろう。

その時根本がもう一つ何かを取り出そうとするのが見えた。

「ちょっと待て明久。根本はまだ何か持ってるぞ」

「ホントだ。あれは……………フォトアルバムだね」

「あの野郎……………」

「どうしたの？あのフォトアルバムがどうかしたの？」

「あれは昨日無くなった俺の宝物だ！」

「なんだって！？根本君め……………」

だからあいつは対等な協定を結んだんだ。姫路を無力化し、俺の弱

みを握れるから。

だが、俺はそんなに甘くねえぞ。俺のフォトアルバムを盗むだけでも充分俺は怒ってるのに、その上姫路の気持ちを踏みにじるだと……ふざけるな。

「明久、お前は姫路を戦線離脱させてから教室に來い」

「うん、先に行つてて」

俺たちは反対の方向に歩きだした。

「あの野郎、ぶち殺す」

俺と明久の台詞が重なる。

「雄二！」

「どうした刀夜？そんなにキレた顔をして」

「俺と明久から話があるんだ」

「がちみたいだな」

「雄二っ！話があるんだ」

明久も來た。これで話が始めれる。

「……とりあえず、聞こうか」

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があつたんだ？」

「俺が説明するよ」

「ああ。そのほうがいいな」

「根本が俺のフォトアルバムと俺たちを怒らせるものを所持していた」

「俺たちを怒らせるもの?」

「それは俺には教えることができない。たぶん明久もだ」
「で? 他にはないのか?」

「俺は化学教師を用意してほしい」

「それなら終わっている。ほら」

教室の片隅には化学担当の布施教諭がいた。

「明久は何かないのか?」

「姫路さんを戦線から外してほしい」

「理由は?」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか?」

「うん。どうしても」

「俺からも頼む」

「頼む、雄二!」

普通一番の戦力を外したりはしないだろう。俺が代表でも断るな。

「・・・・・・条件がある」

「「条件?」」

「姫路が担うはずだった役割をお前らがやるんだ。必ず成功させる」

「もちろん! 必ず成功させるさ!」

「良い返事だ」

「俺たちは何をしたらいい?」

「科目は何でもいいから根本の周りにいる近衛部隊を殲滅してほしい」

「Bクラスの出入り口は?」

「今の状態のままだ」

「・・・・・・難しいことを言ってくれるね」

「俺が化学で特攻する作戦は使えないな」

「失敗は許されないからな。じゃ、上手くやれよ」

「え？どこ行くの？」

「Dクラスに例の指示を出してくる」

Bクラスの室外機のことだろう。

「明久、刀夜」

教室を出る直前、雄二は言った。

「お前らには秀でている部分がある。だから信頼したんだ」

「……………雄二」

「上手くやれ。計画に変更はない」

そして雄二は教室を後にした。

「刀夜、どうする？」

「お前だけしかひらけないBクラスへの道ならあるぞ」

「それって……………」

「……………痛いだろうな。道ができれば俺は行けるぞ」

「……………よっしゃ！あの外道に目に物見せてやる！」

「流石明久。その後は俺に任せろ」

「了解！じゃ、行ってくるよ」

明久は島田を連れて教室から出て行った。

三時一分前、俺はDクラス前で布施教諭と共に待機。

Bクラス前では雄二たち本隊が戦っている。Dクラス内でも明久と

島田が戦っているはずだ。

『アキ、そろそろよ』

『うん。わかってるよ』

Dクラス内から俺にも分かるようにはつきりと声が聞こえてきた。
雄二たちの部隊も引き始める。合図だ。

「布施教諭、こっちだ」

布施教諭を引っ張りDクラスに入る。そして午後三時ジャスト。作戦開始だ。

「だああーっしやあーっ！」

明久の召喚獣が壁に攻撃を放つ。一体何発撃ったんだ。

「・・・・・・・・ぐううつー！」

こんなことは物理干渉能力を持つ明久の召喚獣にしかできない。
その代わりフィードバックも半端じゃないんだろう。

ドゴオッ！

豪快な音と共に、Bクラスへの道ができた。

「ンなっ！？」

壁の向こうには根本と近衛部隊が数人。

「明久っ！良くやったー！」

「刀夜っ！後は頼んだよ！」

「任せろおっ！」

そういつてBクラスに突入する俺と布施教諭。

「Fクラス紗羅崎刀夜が……」

「……」Bクラス近衛部隊全員が勝負を受けます」「」「」「」

一気に六人に取り囲まれる。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

根本が笑う。

「……」サモン試験召喚！」「」「」「」

俺とBクラス近衛部隊全員が召喚をする。点数が表示された。

化学

Fクラス 紗羅崎刀夜 563点

VS

Bクラス 上畠美菜 162点

Bクラス 河村泰三 155点

Bクラス 古西輝樹 181点

Bクラス 森園直哉 177点

Bクラス 柏木昌也 163点

Bクラス 虎井萌 159点

「なんだあの点数！？」

「本当にFクラスか！？」

「とにかく全員で突っ込め！」

六体の召喚獣が俺の召喚獣に向かって走り出す。

「刀夜！避けないと！」

「落ち着けよ明久」

そう言つて俺は召喚獣のアイマスクを外す。

「余裕こいてんじゃねえ！」

「武器もないし防具も雑魚よ！」

「こんな奴点数だけよ！」

そして俺の召喚獣に攻撃できる所まで近づいてきた。

「刀夜ーっ！」

明久が叫んでいる。俺がやられるとでも思ってるのか。

「サントマン
睡魔」

『えっ！？』

俺がそうつぶやいた瞬間、召喚獣の装備していた腕輪が光つて、黒い影が敵に向かっていく。それに当たって敵は全て倒れた。そして点数が表示される。

化学

Fクラス 紗羅崎刀夜 263点

VS

Bクラス 上畠美菜 162点

Bクラス 河村泰三 155点

Bクラス 古西輝樹 181点

Bクラス 森園直哉 177点

Bクラス 柏木昌也 163点

Bクラス 虎井萌 159点

「俺たちの召喚獣、倒れたけどダメージは受けてないぞ」

「でも、動かせないわよ」

「刀夜、どうなってるの？」

明久に聞かれたから答えておこう。

「俺の召喚獣の腕はの能力は『サントマン睡魔』50点消費することで、

睡魔を一体呼び出せる。それに当たった召喚獣は眠って何もできなくなるんだ」

「それって反則だろ！」

近衛部隊が文句を言ってくる。

「でもこの睡魔、50点消費して出しても、一回避けられたら消えるからなあ。

まあ攻撃じゃ消せないってのはいいんだけどな」

「凄いよ刀夜！」

「更に200点消費して武器を出す」

化学

Fクラス 紗羅崎刀夜 63点

	V S
Bクラス	上畠美菜 162点
Bクラス	河村泰三 155点
Bクラス	古西輝樹 181点
Bクラス	森園直哉 177点
Bクラス	柏木昌也 163点
Bクラス	虎井萌 159点

すると俺の召喚獣の背中に円盤状の物体が現れる。その円盤から剣を持った

六本の腕的なものが生えてきた。

「終わりだ近衛部隊」

その六本の腕的なものが剣で近衛部隊六人の召喚獣の首を切断した。

化学

Fクラス	紗羅崎刀夜 63点
	V S

Bクラス	上畠美菜 0点
Bクラス	河村泰三 0点
Bクラス	古西輝樹 0点
Bクラス	森園直哉 0点
Bクラス	柏木昌也 0点
Bクラス	虎井萌 0点

そして200点消費して出した武器は消えた。やっぱり点数の消費が激しい。

ついでに補足しとくと俺の召喚獣の能力で出した武器は、消費する点数によって、

威力が全然違ってくる。武器は使った後、すぐ消滅してしまう。なかなか扱いが難しい。

これで俺は根本を倒せない。じゃあどうするか。まずは教科の特性を説明したいと思う。

各教科にはそれぞれ担当教師がいて、その先生によってテスト結果にも特徴が出る。

例えば、数学の木内教諭は採点が早い。

例えば、世界史の田中教諭は点数のつけ方が甘い。

例えば、今明久の近くにいる遠藤教諭は多少のことは寛容で見逃してくれる。

では、保健体育は？それは教科担当が体育教師であるが為の・・・

ダン、ダンッ！

出入口は人で埋め尽くされ、熱気のこもった教室。

そこに生徒と教師、二人分の着地音が響きわたる。

エアコンが停止したので、涼を求める為に開け放たれた窓。

そこから屋上よりロープを使って二人の影が飛び込み、根本の前に現れた。

そう。保健体育の特性は、教科担当が体育教師であるが為の・・・
・・・並外れた行動力。

「・・・フクラス、土屋康太」

「き、キサマ・・・！」

「・・・Ｂクラス代表根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーン！」

俺が近衛部隊を殲滅したので丸裸の根本。逃げ場なんてどこにもな

い。

「……………試験^{サモン}召喚」

保健体育

Fクラス 土屋康太 441点

VS

Bクラス 根本恭二 203点

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

第八問

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを

月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体

重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個

人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は

人種、

気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

紗羅崎刀夜の答え

『運命』

教師のコメント

かつこよく決めたつもりでしょうが、不正解です。

「明久、随分と思いつた行動に出たのう」

「うう．．．．．。痛いよう、痛いよう．．．．．」

「100%じゃないにしろ素手で鉄コンの壁壊した分が返ってきてるからな」

「なんとも．．．．．お主らしい作戦じゃったな」

「先に思いついたのは俺なんだけどな」

「後のことも考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「．．．．．遠まわしに馬鹿って言ってない？」

「遠まわしでもないな」

学校の壁を破壊するなんて、これで明久の放課後は職員室でハートフルコミュニケーションだ。

「ま、それが明久の強みだからな」

「馬鹿が強みだなんて人類初じゃないのか？よかったな明久」

「刀夜、お前もその類いだ」

「なっ・・・・・・・・」

明久と同レベルのバカ。俺が？

「さて、それじゃ嬉しはずかし戦後対談と行くか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきまでの強気が嘘のように大人しい根本。

「雄二」

「どうした？刀夜」

「根本を貸してくれ。すぐに返す」

「仕方ないな。顔は残しておけよ」

「悪いな」

根本には過剰制裁が必要なんだ。

「おい、根本」

「・・・・・・・・なんだ？」

「ふんっ！」

「がふっ！」

とりあえず攻撃。一撃で沈んだようだ。そして男子の制服を剥ぐ。

「あつたあつた」

フォトアルバムは制服の内側に隠してたみたいだ。中身にも異常はない。

姫路の手紙もこの制服の中だよな。

「明久、ほいつ」

「ありがとう」

根本の制服は明久に渡しておいた。

「う、うう……」

「目が覚めたか？」

「……まだ何かあるのか？」

「そうだな……」

「ん？」

「軽く死にやがれえっ！」

「おいっ！？それは何だ！？止めろっ！っ！」

くしばらくお待ち下さいく

おっと、顔以外ボロボロじゃないか。やりすぎ？そんなのは知らない。

「雄二、これもういらねえ。やる」

「おう。後は任せろ。……って随分派手にやったな」

「そいつが悪い」

この日はそのまま帰宅。次の日からはまた試験だった。

そして二日後。

いよいよ今日がAクラス戦。教室では作戦が説明されている……
・・が、俺は寝ています。

というのも一晩中遊んでたら、朝になつてて寝不足なんだよね。

「残るAクラスだが、一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

外の声が耳に入ってくる。雄二の声だ。てか一騎討ちってこの前行つてたじゃん。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

まあ代表同士だしな。でも勝てるのかよ。はっきり言ったら勝てるとは思えない。

こんなことを考えてる俺は本当に寝てるのだろうか。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!？」

思っても口にするなよ。どうせカッターでも飛ばされたんだな。

「お前はいい加減に起きろ、刀夜!」

殺気だ。とつさに起きて日本刀を構えると俺の方までカッターが飛んできていた。

「喰らうかつ!」

瞬時に弾く。

「良い反応だ」

「寝てる奴に投げんなよ。他の奴なら当たってるぞ」

「お前が避けるのを信じていた」

「そんなこと信じられても困るっての」

何だよこの無駄な時間は。

「で？話の続きは？」

「そうだな。一騎討ちではフィールドを固定する」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史？雄二得意だったか。いや、霧島が苦手なのか。どっちも聞いたことがないな。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度。方式は百点満点の上限あり、

召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

確かに。それなら勝ち目はある。問題もあるけど。

「きつと延長戦だよ？問題のレベルも上がったやうし、雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「これじゃ、作戦つつうよりもただの賭けだな」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？そんな運に頼ったやり方を作戦などというものか」

「？？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中していなくとも、小学生レベルなら何の

問題もないだろう」

じゃどうやって勝つ気なんだ？

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろネタを明かしてもよいじゃろう？」

「ああ、すまない。アイツはある問題が出れば必ず間違えるからだ」

ある問題？なんだよ。

「その問題は……『大化の改新』」

「大化の改新？説明問題か？そんなの小学生レベルででるのか？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない」

「何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。その問題が出たら俺たちの勝ちだ」

随分簡単だな。俺でも間違えないぞ。

「（刀夜、『鳴くよウグイス、大化の改新』で794年だったわけ？）」

「（それを言うなら『いい国作ろう、大化の改新』の1192年だろ）」

なんでこんな簡単な問題がわからない奴がいるんだよ。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は刀夜や明久ですら間違えない」

あれ、645年だったか。

「（僕を・・・・・・・・見ないで・・・・・・・・）」

「（堂々と・・・・・・・・しとこうぜ・・・・・・・・）」

まさか俺たちが間違えていたなんてことは誰も知らない。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

とうにかさつきから気になることがある。

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その・・・・・・・・仲がいいんですか？」

それぞれ。さつきから雄二は霧島を『アイツ』、『翔子』なんて呼んでいた。

一体どんな関係なんだろうか。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

全く、雄二も余計なことを言ったな。このクラスの奴らはそういうことには厳しいのに。

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと？」

「遺言はそれだけか？」

「くっ・・・・・・・・それなら刀夜だって木下姉弟と幼なじみだろっ」

「半数に分かれて二人を狙え」

「雄二、なんてことを言いやがるっ！」

「道連れだ」

「だから俺は優子には振られたんだって！あ……………」

今ので俺を狙っていた奴らが消えました。

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんや木下さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ」

「……………」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃体制をとるの！？それと美波、どうして君は

僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

さすが秀吉。冷静だ。

「む。秀吉は雄二とついでに刀夜が憎くないの？」

俺はついでですか？おい。

「あの霧島翔子じゃぞ。男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが。」

ついでに刀夜は姉上に振られておるのじゃし、気にせんでよいじやろう」

なんか俺の待遇おかしくない？秀吉までそんな態度とか。

「むしろ、興味があるとすれば……………」

「……………そうだね」

俺たちの視線が一人に集中する。

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

慌てる姫路。大丈夫、お前は何かしていないから。何かされるかもしれないけどな。

「とにかく俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えたんだ。
アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

一度覚えたことは忘れない。規格外な人物だな。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は・・・」

『システムデスクだ！』

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は雄二を筆頭に、俺、明久、姫路、秀吉にムッツリー二と首脳陣勢ぞろいでAクラスに来ていた。

いつもこうしていれば明久という犠牲は必要なかったんだろうな。

「うーん、何が狙いの？」

現在雄二と交渉の席についているのは秀吉の双子の姉で俺の幼なじみの木下優子だ。

「雄二、俺が話をしてもいいか？」

「確かに。その方がいいかもな」

「刀夜が幼なじみだからって交渉が上手くいくわけじゃない」

「それより、Cクラスと戦ったんだろ？」

「何の問題もなかったわ。そういえばそのことについて話したいんだけど？」

もしかして墓穴掘った？

「今は交渉中だしな。後にしないか？」

「分かったわ。じゃあ交渉の続きね」

「ああ。優子はBクラスと戦う気はあるか？」

「Bクラスって……昨日来ていたあの……」

「そうだ。あれだあれ。まだ宣戦布告はされてないみたいだけどな」

「BクラスはFクラスに負けたから三ヶ月は戦争を申し込めないんじゃない？」

そう。試召戦争に敗北したクラスは三ヶ月経たない限り試召戦争を申し込めない。

試召戦争が泥沼化しない為の決まりらしい。

「Bクラス戦は和平交渉で終結したらしいぜ。ついでにDクラスもな」

設備を入れ替えなかったからこそできることだ。

「……………それって脅迫？」

「悪く言わないでくれ。ちょっとした提案だ」

「わかったわ。代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「だってさ、雄二」

優子のことだから根本みたいなのと戦うのは嫌なんだろうな。

「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、5V S5の

一騎討ちなら受けてもいいよ」

「なにゆえ？」

「こつちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだろう」

「優子ってあんまり俺のこと信じてなかったんだ」

「戦争なんだから、刀夜の言うことだって鵜呑みにはできないわ」

「その条件、呑んでもいい」

「いいのか？雄二」

5V S5だったら勝ててもギリギリじゃないか。

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう。そのくらいのハンデならいいだろ」

「え？うーん……………」

「Aクラスなんだからそんぐらいいいだろ、優子」

やっぱりさすがに迷うよな。この交渉も戦争の結果に影響を及ぼしてくるし。

「……………受けてもいい」

「うわっ！」

「明久、ビビリすぎ……」

「……雄二の提案を受けてもいい」

いつの間にか霧島が近くに来ていた。

「あれ・代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

霧島は雄二を見た後姫路を観察。

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

あなどれないな、霧島翔子。

「……（カチャカチャ）」

「ムツッリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

こいつらは放っておこう。

「じゃ、勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて」

「交渉成立だな」

そんな簡単に決めていいのかよ。

「（刀夜、このままじゃ姫路さんが……）」

「（雄二はそうとう自身があるってことじゃないのか？）」

ちょっと勝手すぎる気もするけど。

「雄二、大丈夫なんだよな？」

「心配すんな。姫路にも迷惑はかけない」

ここまで言っつてことは確実に勝てるってことだろう。

「……………勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「……………わかった」

なんか話し方がムツツリー二に似てるよ。

「よし。交渉は成立だ。教室に戻るぞ」

「皆にも報告しなくちゃいけないからね」

「やっとここまでこれたな」

交渉を終了し、Aクラスを後にする。

俺たちの試召戦争の終結は、すぐそこに迫っていた。

第八問（後書き）

宿題にテストにで相当遅れました。

もうそろそろ一巻が終わりそうです。

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

第九問

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早期月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……。』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

紗羅崎刀夜の答え

『？アイマスク　？枕　？ベッド　？布団　？夢』

教師のコメント

テスト中に寝るのはやめましょう。

「では、両名とも準備はいいですか？」

「ああ」

「・・・・・・・・問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。まあFクラスじゃ雰囲気でないしな。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは優子。ならこっちは俺か秀吉が適任だな。

「ワシがやるっ」

雄二的には俺じゃだめらしいんです。

「ところでさ、秀吉？」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

ん？なんかまずい気がする。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちにきてくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「秀吉、行ったらだめだ！」

「ちようどいいわ。アンタも来なさい、刀夜！」

俺と秀吉は廊下に連れ出されましたとき。

「姉上、勝負は．．．．．どうしてワシの腕をつかむ？」

「アンタ、Ｃクラスで何をしてくれたのかしら？どうして私がＣクラスの人達のことを

豚呼ばわりしていることになってるのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して．

．．．．．あ、姉上！

ちがっ．．．．．！その関節はそっちには曲がらなっ．．．．．
！」

秀吉、乙です。

「刀夜？」

「．．．．．ん？ドウシタノカナ？」

「秀吉がＣクラスに行ったとき一緒にいたんでしょ？」

「うん。そうかもね．．．．．ハハッ」

「どうしてとめないのよっ！」

「いや、たまには優子も痛い目見たっていいんじゃないかな？って．
．．．．．優子さん！

その関節はそっちには曲がりませっ．．．．．！むぎゅっ．．．
．．．．．！」

ガラガラガラ

教室に戻る優子。

「秀吉と刀夜は用事が出来たから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「い、いや…………。うちの不戦敗で「よくねえ！」

「刀夜！？生きてたんだ。秀吉は？」

「明久、秀吉は…………。うん。それより優子、俺が相手をしてやる」

「まさか戻ってくるとは思ってたわ」

「俺があんなのでくたばるかっての」

「で？科目はどうするの？まあ化学だよね。他の教科でアタシに勝てるわけないもんね」

これは俺に化学を選ばせないための挑発か？そんなの無駄だ。俺はそんな安い挑発に…………

「科目は古典だ！！」

…………乗る男だ。

「アンタホントに馬鹿よね…………」

AクラスだけでなくFクラスからも哀れみの目が向けられているが気にしないでおう。

「俺が化学しかできないと思ったら大間違いだぜ。試験召喚！^{サモン}」
「だったら今勝ってみなさい。試験召喚！^{サモン}」

古典

Aクラス 木下優子 392点

VS

Fクラス 紗羅崎刀夜 5点

「古典の点数が美波より低いってどうなのかな？」

「俺に聞かないでくれ」

明久と雄二の会話が聞こえる。ここはちゃんと教えないといけないことがある。

「俺だって回復試験しなかったらもうちょい点数あったんだよ！」

「ちなみに何点なんだ？」

「聞いて驚くなよ・・・・・・10点だ」

「わかった。早く負けて来い」

「今の二倍もあつたんだぞ！」

「刀夜って僕よりバ力に見えるときあるよね」

「お前らは同レベルだ」

こいつらのことは放っておこう。

「さて、始めようか？」

「よくそれで勝とうと思ったわね」

「そうだ。俺が勝ったら「嫌よ」

「はやっ!？」

「なんで私がアンタみたいなのと付き合いなきゃいけないわけ？
それなら秀吉の女装を認めた方がましだわ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピシピシッ バリンッ

「刀夜が砕けちゃったよ！？雄二、どうするのさ？」

「放っておけ。すぐ元に戻るさ」

「でも木下さんも言いすぎだよ」

「ア、アタシは刀夜と付き合うなんて絶対に嫌なの！」

「刀夜は飯を奢ってもらうとかあ言ってたな」

「それに刀夜なら告白の契約なんてしないで当たって砕けるタイプだもんね」

「そうだな、馬鹿だから考え付かないんだろう」

「木下さんって口ではああ言ってるけど刀夜のこと好きなんじゃない？」

「そうだろうな」

「ちよっと！勝手に話を進めないでくれる」

そして……

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムツツリーニが立ち上がる。

ちなみに二人目の明久は速攻で負けたらしい。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからはボーイッシュな女子。誰だこいつは？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科はなんにしますか？」

「……………保健体育」

ムツツリー二唯一の最強が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね。でも僕だってかなり得意なんだよ？」

君とは違つて、実技でね♪」

大胆ですね。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったら

ぼくが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ……」

「アキにはそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません」

かわいいそうな明久。

「じゃあそっちの紗羅崎君は？」

「ほう、俺の保体の点数を上げれると？だったら喜んで……
つて関節がっ……！！

優子さんっ！？何をして……！！むぎゅっ……！！」

なんでやられたんだ？

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試験^{サモン}召喚っ」と

「……試験^{サモン}召喚」

二人の召喚獣が出現。

「なんだあの巨大な斧は!？」
「でかいねえ」

工藤の召喚獣は巨大な斧に加え、腕輪を装備していた。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤の召喚獣は斧に雷光を纏わせムツツリー二の召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリー二くん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・加速」

斧が振るわれた瞬間、ムツツリー二の召喚獣の姿がぶれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・加速、終了」

そして工藤の召喚獣は全身から血を噴き出して倒れた。

保健体育

Aクラス 工藤愛子 446点

VS

Fクラス 土屋康太 572点

「Bクラス戦の時は出来がいまいちだったらしいからな」
「なーる」

これがムツツリー二の本気か。

「そ、そんな・・・・・・・・！この、ボクが・・・・・・・・！」

随分ショックみたいだな。

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは唯一Aクラスとともに戦える姫路。

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席、久保利光」

学年三位の実力者で、姫路のリタイアによって次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ」

この二人の実力は互角だ。どうなるかは分からない。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

こいつぁ勝ちに来たな。

「それでは・・・・・・・・」

しかし勝負は一瞬で決着がついた。

総合科目

Aクラス 久保利光 3397点

VS

Fクラス 姫路瑞希 4409点

「ぐっ・・・・・・・・！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

頭の悪い男だらけのFクラスが好き？よく分からん。

「これで二対二です。最後の一人、どうぞ」

「・・・・・・・・はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島翔子。もちろんこっちは・・・・・・・・

「俺の出番だな」

坂本雄二。こいつしかいない。

「教科はどうしますか？」

学年主席が負けるわけがないと思ってるのか、Aクラスの連中は静かだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ・・・・・・・・！

雄二の宣言でAクラスがざわめく。俺たちに勝利の可能性が出たからだ。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任せられた」

雄二と明久が手を握り合っている。

「・・・・・・・・・・（ビッ）」

ムツツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「・・・・・・・・・・（フッ）」

ムツツリーニは口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

雄二が珍しく優しい表情になる。

「刀夜！」

「なんだよ？俺にも何か言っしてほしいか？」

「お前が最初に化学を選べば楽勝だったんだがな」

「化学でも負けてた気がする・・・・・・・・」

「まあ、きっちり勝ってくるさ」

「負けたら殺すからな」

「わかってんよ」

雄二と霧島は視聴覚室へ、その様子が壁のディスプレイに映し出された。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点です』

『不正行為は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

「吉井君、紗羅崎君、いよいよですね……!」

「そうだね。いよいよだね」

「これである問題がなかったら坂本君は……」

「負けるな。だけど」

「はい。もし出ていたら」

「僕らの勝ちだ」

そして問題が映し出される。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

これなら俺でも分かるぞ。

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ……!」

あった。

「これで私たち……！」

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

Fクラスの声が揃う。

「最弱が最強に勝つつつ、歴史的な勝利だ！」

『うおおおおっ！』

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第十問

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「三対二でAクラスの勝利です」

言われなくても分かっている。俺たちは負けた。

「・・・・・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・・・・・・殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ！」

「切り刻んで蜂の巣にしてやんよ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「刀夜、アンタもよ！」

ぬっ、とめられるとは……

「だいたい、53点ってなんだよ！」

「つたくだ0点なら言い訳れただろうが！」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキに紗羅崎、アンタたちだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「まあ明久はしかたないけど俺なら100点ぐらい軽いな」

「で？実際は？」

流石優子だ。嘘が通じねえ。

「15点あれば良い方かな」

「それなら、二人とも坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波！それに木下さんも！この馬鹿には喉笛を」

引き裂くという体罰が必要なのに！」

「明久の言うとおりだ！三人とも大人しくしてくれ！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

仕方ない、今回は見逃してやろう。

「……でも、危なかった。雄二が初戦小学校の問題だと油

断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「図星かよっ！」

「……………ところで、約束」

そっぴや、何でも言うことを聞くつて約束をしてたな。

「……………！！（カチャカチャカチャ！）」

ムツツリーニはやつ！と、何気に手伝う明久。

「わかっている。何でも言え」

そして自分のことでもないのにかっこつけんなや！

「……………それじゃ……………」

これで姫路は霧島の手に……………明久ドンマイ。

「……………雄二、私と付き合って」

あら？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

状況がつかめねえ。

「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……………私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

霧島は女子好きじゃなくて、雄二が好きだったのか。

姫路を気にしていたのは雄二の周りの異性が気になったから、とか？

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに……………」

ぐいっ　つかつかつか

霧島&雄二が退場。

「……………」

唐突過ぎて言葉が出ないな。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

この太い声は……………やはり鉄人。

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

「我がFクラス？」

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、俺に担任が変わるそうだ。

これからは死に物狂いで勉強できるぞ」

なんで雄二は負けやがった！なんか熱い男に説教されるはめになったじゃねえか。

「吉井、紗羅崎。お前らと坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と人災の模範にA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「甘いな明久。俺なら監視の目をものともせず暴れてみせる！」

「……お前らには悔い改めるといふ発想はないのか」

そんなのではない。明久はちょっとありそうな顔してるけど。

「さあ、アキ。補習は明日からみたいだし、

今日は約束通りクレープでも食べに行きましようか？」

「え？美波？それは週末って話じゃ……」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

これじゃ明久は次の仕送りまで大変だなあ。

「刀夜、助けてよ！」

「仕方ないな……俺は帰る」

「ええっ！そんな……」

俺の勘が早くここを離れろと告げているんだ。

「刀夜、待ちなさい！」

「ちっ……なんだ？優子」

「戦争で私に勝ったらご飯奢ってもらおうと思ってたの？」

「ま、まあ……」

「じゃあ私が勝ったから週末に一日付き合って」

「え？いや……遠慮しようかなあ……って、どう

して俺の腕を持つ？まさか関節技か？」

「違うって言ったら嘘になるわね」

笑いながら恐ろしいことを言わないでほしい。頼れるやつはいないのかよ……

「鉄人！？」

「鉄人と呼ぶな！そしてどうした？紗羅崎に吉井」

「補習は今日からにしませんか！」

「週末も全部埋めてくれ！」

「思い立ったが仏滅です！」

「そう！俺もそう言いたかった」

「『吉日』だ、バカ」

「んなことどうでもいいんだよ！」

「お前らにやる気が出たのは嬉しいが……」

俺達の様子を確認する鉄人。

「今日だけは存分に遊ぶといい。あと週末もだ」

ニヤケテンジャネエヨ！

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には

伝説の木下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「なら俺は対戦車用のスナイパーライフルで明久が鉄人を引きつけてる間に撃つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

今までの恨みも込めて気づかれないように暗殺してやる。

「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げようっ たって、そうはいかないからね！」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「僕の財産がつ！」

「アキ！いいから来なさい！」

「わ、私と映画に行くんですよね！」

「ほら、クレープ食べに行くわよ！」

「いやああっ！」

サヨナラ明久の生活費。

「アンタは抵抗しないの？」

「無駄だからさ………」

「じゃ、帰るわよ」

とりあえず男なら腹をくくろう。

第十問（後書き）

とりあえず一巻終了です。

この後はどうするか迷い中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3095v/>

バカとテストと召喚獣と

2011年10月9日13時33分発行